第Ⅱ部門

大阪府下の二、三の親水施設に関する周辺住民の意識についての一調査

大阪市立大学　正 会 員　　角野昇八
大阪市立大学　学生会員　○　常岡俊宏

1. まえがき

これまでの河川事業では、治水や利水が専ら重視されてきた。都市河川では、そのうち特に治水対策に重点が置かれ、その結果、河川の持つ本来の豊かな自然や潤い、良好な水辺環境が失われ、人間と河川との関係が遠ざけられている傾向にあった。

しかし、最近では、その反省にたって、生態系の保全や緑の景観を生かした空間の整備が都市河川でもなされつつある。そこで、ここでは河川空間を生かした施設として遊歩道および親水公園を取り上げ、今後の水辺空間のあり方について考えていくことを目的として、それらの施設に対して河川付近の住民がどのように思っているのかをアンケート調査をし、それについて考察した結果を報告する。

2. アンケート調査対象河川

今回調査の対象とした河川は、吹田市中央部から南西に流れ、神崎川に合流する糸田川、柏原市・八尾市を通って大阪市を流れ、第二寝屋川に合流する平野川、八尾市から北上し、第二寝屋川に合流する楠根川の計 3 河川である。糸田川、平野川には遊歩道が整備されているが、親水空間はない。一方、楠根川には、短い遊歩道と親水公園が整備されている。

3. 調査方法と回答者の内訳

アンケート用紙の配布と回収は、当該地区の自治会長や町会長に依頼するか、戸別に訪問してその場で回収、あるいは、戸別に配布して郵送によって回収、の 3 つの方法で行った。各河川ごとの回答者の内訳を**表-1** に示す。

表-1　回答者の内訳（人）

対象河川	男	女	不明	計
糸田川	43	54	1	98
平野川	22	33	0	55
楠根川	30	33	0	63

4. 調査結果

1) 過去 10 年間の水質変化に対する回答結果

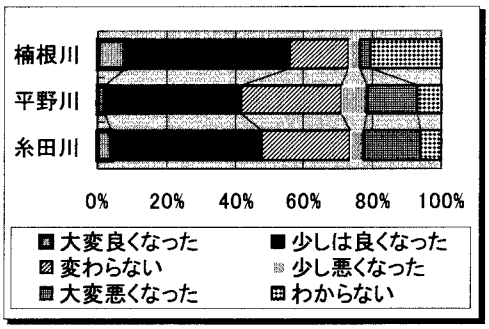

図-1　過去 10 年間の水質変化に対する評価

図-1 は最近 10 年間で河川の水質は良くなったか、という質問に対する回答である。どの河川でも「(少しは) 良くなった」と回答した人が 40%-50%で、これは昨年の調査[1)]での平野川の別地区と同じ結果を示している。良くなった理由を聞いてみると、「ゴミ減」(平野川、楠根川)、「透明度増」(糸田川) が主な回答であった。また、その他の意見で「魚、野鳥が増えた」という回答が多かった。一方、悪くなった理由については、「ゴミ増」が最も多かった。また、環境変化に関する別の質問に対して「悪くなった」と答えた人の理由の大半が同じであり、「河川のゴミ問題」に敏感な人々の姿が浮かび上がる。

2) 遊歩道の満足度（糸田川、平野川）　遊歩道しかない糸田川と平野川の 2 河川で、遊歩道周辺の水質、環境、景観などを含めた全体的な満足度を尋ねた。その結果を**図-2** に示す。

糸田川では満足している人が半数近くまで達していて、ほぼ人々に支持されているといって良さそうである。逆に、平野川では満足していない人の数が満足している人の数を上回っている。その内容について、

Shohachi KAKUNO,　Toshihiro TSUNEOKA

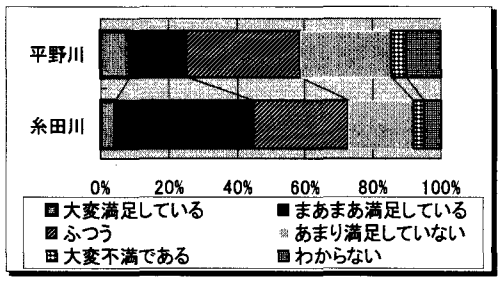

図-2　遊歩道の満足度

川のイメージに対する回答とのクロス集計を行った結果によれば、平野川のイメージとして「遊歩道」ととらえている人は遊歩道に満足している度合いが強いのに対して、「水の汚さ」や、「ゴミ」ととらえている人は遊歩道に対しても不満を持っていることが明らかになった。すなわち、施設がいかに完備していても、周囲の環境要素に大きな欠落があれば、人々から支持される施設とはならないことを結論づけることができる。

3) 親水公園の満足度（楠根川）　楠根川の親水公園についてその評価を尋ねた。その結果を図-3に示す。「まあまあ良い」を含めて7割程度の多くの人々に支持されているのが分かる。その理由を聞いてみると、「ゆとりある空間だから」が最も多く、「川の水に近づけるから」などの親水空間としての支持のされ方は少ない。このことより、人々は、オープンスペースとしての公園を楽しんでいる様子がうかがわれる。また、悪い評価をしている人々のほとんどが「水が汚いので」であった。これらのことから、前記のように、水質が最近良くなったと感じている人がかなりの割合でいるものの、水に親しむほどにはまだ至っていないと感じていることがわかる。すなわち、ここでも、親水公園本来の機能が人々から愛されるためには、水質のいい水域が保証されてこそということが結論づけられよう。

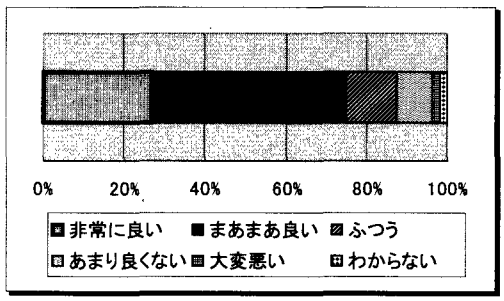

図-3　親水公園評価（楠根川）

4) 親水空間造成に対する賛否　現在、親水空間を持たない糸田川と平野川周辺の人々に親水空間造成に対する賛否を問うてみた。その結果を図-4に示す。どちらの地域でも半数以上の人々が賛成しているのが読みとれる。賛成の理由としては、糸田川では「魚・野鳥が見られる」などが多く、また平野川では「流れを見ることができる」などが多かった。前記の楠根川での結果をあわせて考えるとき、両河川のように親水空間が未整備の状況では、人々は「親水機能」を期待してその整備に賛意を表す傾向があるのに対して、楠根川のように整備が実現しても、水質などの環境要素が満たされなければ、必ずしも人々から本来の機能では評価されないことがあることを結論づけることができる。

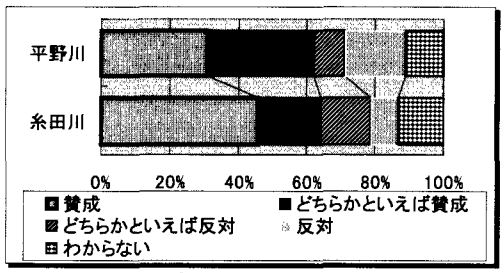

図-4　親水空間造成に対して

5. まとめ

今回の調査では、これまでの調査[2)]と同様、遊歩道や親水公園などの施設整備以上に、人々はまず「水質」の改善を望んでおり、なかでも「ゴミ」は河川周辺住民にとって深刻な問題となっていることが明らかになった。親水施設の整備については、それが未整備の糸田川および平野川付近の住民は、その整備を望む声が多かったが、現にそれが整備されている楠根川では、親水性という意味での評価のされ方はなされていないことが明らかになった。

参考文献

1) 角野・後藤：大阪の河川に対する周辺住民の意識に関する一調査（第2報）、関支講、1998.
2) 角野・大谷：大阪の河川に対する周辺住民の意識に関する一調査、関支講、1997.